

消防新時代をデザイン

1

JAN 2010
No.588

THE FIREFIGHTER



〈特集〉阪神・淡路大震災から15年

〈新春特別対談〉

河野栄消防庁長官／新井雄治全国消防長会会長

〈新連載〉(続)消防法令用語の基礎知識

〈全国消防最前線②〉兵庫県内の消防

〈巻末付録〉『近代消防』(平成21年1月号~12月号)総目次

特別付録
消防ダイアリー
2010年版

新春特別増大号

35

〈特集〉阪神・淡路大震災から15年

36 創造的復興へ向けた15年間の取組

兵庫県防災企画局復興支援課副課長 亀井浩之

44 危機管理と情報システム

西宮市CIO補佐官兼西宮市情報センター長 吉田 稔

49 避難所運営にどう対応するか

地域防災研究所所長 大間知 優

50 「楽しい防災活動」を合い言葉に

加古川グリーンシティ防災会会长 大西賞典

56 震災から15年 神戸市におけるトイレ対策とその現状

神戸学院大学大学院博士後期課程 渡辺あづさ

65 阪神・淡路大震災以降における総務省消防庁の震災対策の取組

総務省消防庁国民保護・防災部防災課震災対策係長 上坂勇人

総務省消防庁国民保護・防災部防災課応急対策室広域応援企画・広域応援調整係長 吉川昭雄

74 阪神・淡路大震災以降の消防研究センターにおける地震防災研究

総務省消防庁消防研究センター地域連携企画担当部長 座間信作

80 気象庁における地震活動等監視体制の強化

気象庁地震火山部地震津波監視課課長補佐 尾崎友亮

84 阪神・淡路大震災以降における東京消防庁の震災対策

東京消防庁防災部防災課

94 新宿新都心の防災まちづくりと震災の教訓

一被災者として 児島 正

100 もっと震災の教訓を生かそう

防災アドバイザー 森田 武

104 身近な地震減災

ヤルデア研究所 伊東義高

16

〈全国消防最前線⑤〉

兵庫県内の消防

阪神・淡路大震災から15年。
被災地消防の歩んだ道程と取組

編集局

17 地域、事業所等と連携した防災力を構築 一神戸市消防局一

21 消防防災ヘリの特性を生かした活動を展開 一兵庫県消防防災航空隊・神戸市消防局航空機動隊一

22 野島断層保存 北淡震災記念公園 野島断層保存館

23 確実性と辛抱強くやり遂げる強い消防力 一西宮市消防局一

25 広い視野と結束力で、構成3市の明日を守る 一淡路広域消防事務組合消防本部一

27

〈東西南北 消防団訪問レポート⑩〉

神戸市灘消防団／淡路市消防団

阪神・淡路大震災から15年。震災を乗り越え地域密着型の活動で町を守る

編集局

109

〈新春特別対談〉

最近の消防防災行政の取組と課題等について

河野 栄 消防庁長官／新井雄治 全国消防長会会長

120

インドネシア西スマトラ州パダン沖地震災害
国際緊急援助隊（JDR）救助チームの活動

総務省消防庁国民保護・防災部参事官付参事官補佐（国際消防救助隊総括官） 中越康友

145

札幌市消防局における査察行政の展開

札幌市消防局特別機動査察隊

132

〈新春企画〉全国各都市の消防マスコットキャラクター大集合！

134

〈特報〉危機管理産業展2009／テロ対策特殊装備展'09

225

〈巻末付録〉『近代消防』（平成21年1月号～12月号）総目次／〈特別付録〉消防ダイアリー 2010年版

「楽しい防災活動」を合言葉に

—新しいスタイルの防災活動—

加古川グリーンシティ防災会会長

大西 賞典

(編集: Team KGC)

加古川グリーンシティ防災会

兵庫県加古川市のJR加古川駅から東へ徒歩10分のところに、約2,000人が生活する7棟14階建ての加古川市内初の高層マンション「加古川グリーンシティ」があります。建設後に結成された自衛消防隊が後に防犯防災委員会となり、平成7年1月17日の阪神・淡路大震災がきっかけとなり「加古川グリーンシティ防災会」へと進化しました。

この大震災で、加古川市内でも死者2名、半壊家屋13棟の被害を出しました。加古川グリーンシティでは地震による人命被害は無かったものの、棟間を結ぶ階段の接合部分であるエキスパンションの破断により階段の使用不可、壁面にX状のひび割れや亀裂が入るなど約3,000万円程度の被害が発生しました。また、地震直後から当時の管理組合の理事数名が管理事務所に詰め、対応に追われる管理事務所のサポート等にあたられていたと聞いています。

被災後、「自分たちのマンションを守ろう」と意識は高く、復旧に向けて進めてきましたが、大規模修繕を長期修繕計画以上に行わなければならない管理組合理事会や管理会社（株式会社ジャーネットシステム）には想像を超えた苦労を掛けたようです。

また、当時マンションには、大阪や神戸等の阪神間に通勤する方が多く居住されていたため、震災直後は、一時的に家族と離れ、単身で職場の寮や親戚先などから通勤する等の工夫をされていたようです。

さらに、加古川から大阪・神戸を結ぶJR神戸線・阪急電鉄神戸線・阪神電鉄本線の3線がこの地震で不通になっていたため、普段は大阪までの通勤はJR神戸線で1時間程度なのですが、震災後はJR加古川線からJR福知山線を乗り継ぐ経路となり6時間以上かかりました。また、神戸へは通常であればJR神戸線で40分程度なのですが、途中から徒歩やバスなどを乗り継いで2時間以上かけて通勤されていたようです。

そのような状況の中でマンション居住者の間でも、「何かを始めなければ」という意識が高まってきました。

当時「ボランティア元年」と言われた被災後の救援や復

旧活動におけるボランティアの高まりを受けた兵庫県では、災害ボランティア支援方針のもと県下に自主防災組織の結成を呼びかけていました。加古川グリーンシティ管理組合もこの呼びかけに応え、平成10年6月、これまでの自衛消防隊と防犯防災委員会が融合した「加古川グリーンシティ防災会」を設立しました。

加古川グリーンシティ防災会の取組

当防災会では、設立当初の活動として平成7年の阪神・淡路大震災後にクローズアップされた「マンションの災害対策」について徹底的に取り組んできました。

マンションはプライバシーが守られる反面、ご近所付き合いが薄いのが最大の問題だと言われていました。この問題をいかに解決し、どうすれば仲間が増え、みんなが防災活動に取り組むことができるようになるのかを考えました。そこで考えだしたのが、楽しくなければ防災の輪は広がらない「楽しく防災活動をやろう」というスローガンです。このスローガンを掲げ、住民の方々に対し多彩なアイデアを仕掛け、これら諸問題を乗り越えることができ、「仲間づくり」をすることに大成功しました。

しかし、私たちが行う防災活動は「マンションの災害対策」だけではなく、基本に戻り「防災活動」とは本来どうあるべきなのか、そもそも「防災」とは何なのか、「何に対して」防災をするのか、私たちは「何を守る」ために防災活動を行うのかなど、「防災」が持つ本当の意味を追求していくようになりました。そこから生まれたのが「自分の大切な人を守る」ために防災活動を行うべきなのだと、ひとつの答えが浮かび上りました。

過去を嘆く今ではなく、 今を変えようとする未来への意志を持つ！

阪神・淡路大震災では、多くの方が被災から復旧・復興がいつになるのか日々不安が募るばかりでした。「何かをしなければ」という意志はあっても「何をすべきか」が分からない。その意志は個々の頭の中にしかなく、その意志

を共有しなければならないことすら分からぬ状況でした。

私たちは、人の足を止めるのは「絶望」ではなく「諦め」であり、人の足を進めるのは「希望」ではなく「自らの意志」だということに気付いたのです。絶望に陥ったことから、「抜け出すこと、這い出すこと」を諦めてしまったから、自らの足を止めてしまう。人は「夢」や「希望」があるから前に進むのではなく、その「夢」や「希望」を探そうという「自分の強い意志」で前に進むのだと気付いたのです。「絶望」は決して終着点ではなく「絶望」に陥ったときに、そこで諦めてしまうことこそがすべての可能性を閉じてしまうことなのです。どんな絶望のどん底でも、希望は捨てず自分自身の心を信じ、自分自身の信念を信じて、自分の強い意志で新しい道への一歩を踏み出すこと、それこそが「自分の大切な人を守る」ことであり、そして生き抜くための「未来への意志」こそが、どんな強い運命にも打ち勝てる「ちから」だと考えたのです。その志を基に個々にそれぞれが動くのではなく、チームで動く「継続できるチームづくり」を行うことにしました。

志だけでは進まない「防災」

確かに「志」は必要なことなのですが、志だけでは防災を行うことはできないことを知ることになりました。なぜならば、一般市民である私たちができる防災活動とは何をすればよいのか、その道標となる「防災教科書」が無かつたからです。そのような中、加古川市で行われた防災講演会で、阪神・淡路大震災当時、兵庫県の尼崎市消防局長であった堂本嘉巳氏の講演を聞いたのです。防災とは何なのか、手探り状態の当時の私たちにとって、藁をもすがる思いで食い入るように堂本氏の話を聞きました。その中で「どこの地域にも特殊な技能・技術や免許を持っている者がいる！それを地域防災に取り入れなければいけない」と力強く話されていました。聞いていた私たちにとってこれも防災活動なのだと「目から鱗」の話ばかりでした。

この講演会の帰り道にみんなで話をしながら生み出されたのが、特技登録制度「町内チャンピオンマップ」を創ろうという決意でした。

これをきっかけに加古川グリーンシティ防災会が大きく前進することとなったのです。

チームづくりが私たちの防災戦略

「防災活動」は社会的に必要な活動であると分かっていても、「防災」という固い漢字2文字により難しく考えすぎて、活動に一歩足を踏み入れにくく、人が集まりにくいとい

難点があります。「防災」とは、人と人との繋がりがあつてこそその「防災」です。講演会を開き、難しい顔で「拝聴します」というような活動をしていても、おそらくそこからは何も生まれないのではないかと思います。現実に素晴らしい防災学や防災研究がありますが、それらがそのまま地域防災や自主防災には決してならないのが現実です。なぜならば、防災の主役は我々一般市民だからです。その人たちの心根に強く訴えなければ何も変わらないし、何も生まれてこないのです。

要するにみんなが楽しく心の底からワクワクするようなものを提供する。そこから我々が追求する地域コミュニティ、地域防災、自主防災力などが生まれ育っていくのだと思ったのです。

そこで私たちは「防災」という言葉を前面に出さず、堅苦しくならないように行事を行い、参加者が「知らず知らずのうちに防災に関わってしまった」と感じるようになり、強いまちづくり、仲間づくりをすることに大成功しました。これが私たちの考える防災戦略である「防災を防災と語らずとも防災の役割を果たすこと」、そして普段の生活の延長線上に防災を位置づける「生活防災」（矢守克也・京都大学防災研究所教授推奨）を加古川グリーンシティ防災会の防災・減災活動としました。

楽しく防災活動をやろう

「楽しく防災活動をやろう」の基本は、何があってもグリーンシティの住民全員が無事であってほしいということです。そのためには、すべての方に防災意識を持ってもらうことが最大のポイントでした。そこで私たちは、「グリーンだより」（広報誌）、「グリーンネット」（マンション運営情報及び緊急情報伝達システム）、「ニューメディアシステム」（テレビの空きチャンネルを利用してのコミュニティ放送）、「命のライセンス」（災害発生時の行動指針を示した冊子）等を考え、普段から心得ておいてほしいことや最新の情報、緊急の情報などを常に提供できる設備とシステムを構築しました。

災害時に主として成人を対象とした「助けることができる人」、主に高齢者及び災害弱者を対象とした「助けてもらいたい人」の登録制度、「子どもたちとの合同の町内夜回り」、世代間交流を目的とした「餅つき大会」等、すべての世代が防災活動に参加できる行事を実践しています。私たちは「継続すること」が大きな力になると想っています。そのためには楽しくなければなりません。「楽しく防災活動をやろう」は防災会設立当初から私たちの基本であり、活動継続の秘訣であると思っています。

コミュニティこそがライフライン

生きていくために一番必要で基本的なインフラ〈水道・ガス・電気〉をハード面のライフラインとするならば、コミュニティはまさにソフト面のライフラインといえるのではないかでしょうか。「防災を防災と語らずとも、防災の果たす役割を語る」こと、それが、加古川グリーンシティ防災会のコミュニティへのひとつの仕掛けです。

コミュニティの中にはそれぞれの意見や要望があります。通常、それは衝突しがちですが、「楽しくやろう」を基本にコーディネートすると、そのエネルギーが大きな力に変わるのであります。防災活動は継続が大事ですから、限られた人だけではなく、みんなの知恵や能力を活かせるシステムを作り、楽しくやることが大切であると思いソフトとハードの2色に分けて防災活動を行っています。

【ソフト面での主な事業】

①町内チャンピオンマップ

防災意識の向上と、緊急時や災害発生時に何をするべきか、何を応援してもらうのか、緊急ボランティアをどのように呼びかけるのか等、知恵袋集団やご意見番的集団として協力をお願いし、もしものときに適切な人に迷わず助言・力を借りることができますようにしました。

災害発生時、自分一人で対応することはできません。しかし、多くの人が集まれば色々な物事への対応が可能になるはずです。「子守ならできます」「何でもやります」「お手伝いであればやります」「炊き出しきれます」等、何でも登録していただき、いざというときの防災会の強い支えになってもらいます。

②ひと声掛けて登録制度

お年寄りの方や傷病者、障がいをお持ちの方がいらっしゃ



写真1 広報誌「グリーンだより」など豊富な防災情報を提供

るご家庭等に、災害時に少しでも早く声掛けをするため、「災害時にひと声掛けてください登録」を呼び掛けました。「町内チャンピオンマップ」「ひと声掛けて」はセットで、災害に強いまちづくり、地域づくり、そして私たち自身の減災に役立つ取組です。

③あんしん情報登録制度「あんしんカード・REC」

普段、運転免許証を持っているからといって安心だと思うとそれは大間違です。免許証は個人の身分証明にはなるのですが、連絡先等がまったく書かれていません。このカードには、血液型、治療中の病気、かかりつけの病院、緊急連絡先、広域災害時に役立つ遠方の親戚などを家族共通の連絡先、また地域避難場所なども記載しています。

もしも登録された方が事故などにあったとき、「あんしんカード」を携帯しておくことにより指定された緊急連絡先に速やかに連絡を行ったり、家族の方や親戚に連絡することができるシステムです。「レック・REC」は Relief Card の頭文字からとっており、「安心な情報を記録する」という意味となります。

④グリーンシティ防災マップ

災害時には力を合わせて、いのち、財産、わが家、わがまちを守る! 防災力を高め、団結して緊急事態に立ち向かうためのグリーンシティ防災マニュアルを作成。地域防災のエッセンスが集約されています。

⑤ふれあい餅つき大会(炊き出し訓練)

災害時を想定した炊き出し訓練の一環で、この活動を通して地域の方々とのふれあいや繋がりを大切にし、防災会をアピールする広報活動の場でもあります。また、防災会の貴重な人材発掘の場でもあり、この活動を経て、防災活動に積極的に参加していただける方を増やすことに成功しています。

⑥あいさつ運動

ご近所付き合いも薄く、あいさつも無いようなまちで防災活動は絶対に広がりません。まして被災時において「どちら様でしたでしょうか?」等と言っている間に次々と人の命が消えていきます。何か起こったときに素早い初動体制が組めるのはやはり日頃のあいさつから始まるのです。

⑦自警団設立と子どもたちと合同の夜回りによる防犯防災意識の啓発

防災会の防犯担当部門として自警団を設立。幅広い世代の方々に協力を呼びかけ、夜回りや不審者対策などに多くの人たちが参加。子どもたちをいかにして防災会の活動に

引き込んでいかを考えました。子ども自警団員にはオリジナル自警団カンバッチやシール等を作成配布し、防犯意識の向上と青少年の健全育成、社会のルールや交通ルール等を守る意識を啓発しています。

⑧毎月の広報誌「グリーンだより」発行による住民意識の高揚（写真1）

毎月発行されるフルカラーの広報誌です。平成21年11月現在で218号となりました。防災意識の高揚、危機管理の意識、災害時に向けての対策等を毎月啓発しています。

⑨サッカーワールドカップ観戦会の主催

次世代の防災会員の育成のため地域の子どもたちに防災会を広報し、緊急時に子どもたちが防災会の一員として動けるための広報活動として行い、防災会役員や自警団などの顔を子どもたちに知ってもらうための活動です。

⑩「命のライセンス」の作成（写真1）

突然大地震が発生してもあなたと家族が無事でいられるように作成したもの。地震発生直後から3日間をいかにあせらず過ごすかをまとめています。必要なときに取り出して見られるように小型のカードサイズにしました。必要最低限の内容にし、折に触れて読み返し、いざという時に慌てず行動できるようにしました。心肺蘇生法や避難場所、防災関係窓口、そして災害伝言ダイヤルの使用方法などを記載。「命のライセンス」は静岡県防災局からデータを提供していただき、グリーンシティに合わせた形式に変更し、制作しました。

⑪応急手当普及員による市民救命士資格取得の啓発・訓練

・資器材の整備

加古川市防災センターの応急手当普及員講習において、応急手当普及員の認定（現在16名）を受け、グリーンシティ内外で多くの方々に救命に必要な応急手当の指導を行っています。グリーンシティ応急手当普及員による普通救命講習会では、AED（自動体外式除細動器〔敷地内4台設置〕）を使用した心肺蘇生法の基礎知識、技能及び指導要領を学習し、AEDを正しく安全に使用できるよう徹底した訓練を行っています。また、講習会への参加啓発活動と定期的な復習会も行っています。

⑫D I Gを取り入れた防災訓練の実施（写真2）

大きな地図をみんなで囲み、地図上で災害対策本部運営のシミュレーションを実施することによって、防災を行う上で肝心な「自分たちが受けるであろう被害」を把握し、災害に対してどう備えるかを学んでいます。進めて行く中



写真2 D I Gを取り入れた防災訓練

で、自分たちの住む街や、助けを求めている人の住む街がどのような状態になっているのかを再発見できたり、地図が何を訴えているのかが理解できるようになります。しかも「D I G」は作戦会議のようなもので非常事態ということを想定すれば誰でも何かしら言いたくなります。個人と個人の意見がぶつかり合うことで参加意識は高まり、災害の対応や救援活動などについて、様々な考え方があるということもおのずと理解できます。その意見交換からよりよい防災活動の在り方がイメージされていくことになるのです。幅広い年代層の方々に参加していただき、経験や知恵を借りながら楽しく行っています。

開催にあたり、D I Gの知識が全く無かった私たちに、小村隆史・富士常葉大学環境防災学部准教授と平野昌・鈴鹿市防災担当（三重県）の方々がマニュアルやノウハウ等を伝授してくださいました。

⑬「1,000円出しの会」楽しくやろう防災会議

会社や仕事関係などの利害のない仲間が集まって、腹を割って話をするコミュニティの場です。理事会、役員会、夜回りなどの後に1,000円ずつ出しあって行う「飲み会・ワークショップ」。この会の中から様々なアイデアが発掘されました。気軽に仲間を増やしていく場で、この会を通して多くの人材を防災会に引き入れていきました。

⑭エレベータ緊急時応急手当訓練

大規模な地震の際、消防は消火や倒壊家屋からの人命救助等の対応に追われ、エレベータからの救出に向かうことができないと想定されます。また、エレベータ保守会社も公共施設や病院などから優先的に確認作業に入ると思われます。その対策としてグリーンシティ独自の救出体制の整備が必要だと考え訓練を行っています。

⑯ イカ焼き機で炊き出し訓練（写真3）

関西ならではのイカ焼き機（炊き出し装置）は、1回に1分で4人分のイカ焼きを焼くことができ、行列になってしまはずに提供できるので、待ち時間のいらだちが緩和できます。また、両面に熱源があるため生ものや色々なものを短時間で供給することができます。そしてなにより、食べている人々は笑顔でいっぱいになります。

⑰ 「防災インターネットラジオ」開局による防災啓発と遠隔地との通信体制

ホームページを利用して平成19年1月よりインターネットラジオを配信しています。平成20年からは地元FM局「BAN-BANラジオ」の協力で、防災会メンバーが電波の届くエリアの2市2町の方々に向けて「楽しく防災ラジオ」を放送しています。「楽しく」をコンセプトにした防災減災への取組を発信。難しく考えず、気楽に日頃の生活の中で自然に災害に対して備え構えられることをお知らせしています。第40回目の放送より「防災S H O T B A R」としてリニューアル。防災の内容に、毎回、災害で被災した各地の酒蔵からお酒を取り寄せて紹介する、お酒を取り入れた一風変わった防災ラジオ番組です。インターネットを通じての配信とグリーンシティ内では自宅のテレビで見るマンション内コミュニティ放送「ニューメディアシステム」でも日曜日に放送。活字で伝えにくいような情報をわかりやすく、「楽しく防災活動をやろう」をコンセプトに、「生活の中に防災を組み込む・生活防災」を伝えています。また、災害時には遠隔地との通信体制としても機能させることができます。

⑱ 「帰宅支援センター」の作成（写真1）

いち早く家族の元に帰りたい！しかし、帰宅のためのアクセスが断絶している。そのような場合、無理をして「帰



写真3 イカ焼き機を使った炊き出し訓練

るべきか？」「残るべきか？」と言うシミュレーションで、帰宅困難者や帰宅難民になる可能性のある人たちに向けた「帰宅支援センター」を作成しました。

仕事場や出先で災害が発生した場合、どのような行動をとればよいのか、パニックに陥りそうな発災時でも、できる限り正確な判断を行えるよう持ち運び簡単なポケットサイズで制作しました。

⑲ 「安否確認プログラムSCP（スコップ）」の開発

災害発生時に住民の安否をいち早く確認するため「SCP」を開発。「SCP」は Safety Confirming Program の頭文字からとっています。発災時に埋もれてしまう情報を掘り起こすと言う意味となります。

各戸の安否確認が取れた所から、色によって現在状況を一目で判別でき、搬送先や避難先も登録が簡単にできるシステムです。

⑳ 非常持ち出し本の発行（写真1）

地震やその他の災害に遭遇した場合、あなたとあなたの大切な人がどのような危険にさらされ、日常の生活がどのようになってしまうのかを想像した「災害イメージ本」です。災害発生後、どのような状況に置かれてしまうのか、また、それ以前に今何をしておけばよいのかをこの1冊(173ページ)にまとめました。災害が発生する前にできることは多く、備え、構えるための時間の長さは、発生してからとは比べものにはなりません。災害による影響をイメージすることで、災害より一歩先の行動をとることができ、受けるであろう被害を軽減することが可能になると思うのです。災害に備え、構えるための方法は沢山ありますが、あなたが受ける災害をイメージしておかなければ、どんなに備えをしたとしても、あまり意味がありません。「災害をイメージする」ことで、非常に有効な対策や準備ができ、あなたとあなたの大切な人が直面する被害を少しでも軽減するためのアイテムです。

【ハード面での主な事業】

① マンション運営情報及び緊急情報伝達システム「グリーンネット」構築

全家庭へ新規にLANケーブルを敷設、光通信による居住者間のインターネット情報伝達とインターネットアクセスの円滑化を行います。防災面及び今後のマンション運営面を考えたとき、自宅で確認できる「情報共有設備」の必要性を強く感じ、導入を決定し、愛称を「グリーンネット」としました。

災害発時のインターネット網を強化する目的として、複数プロバイダの光通信網を利用し、災害発時のバック

アップ体制も構築しています。

②ニューメディアシステムの各家庭への配信

防災・緊急情報及び普段の生活情報から各種コミュニケーション情報等を、テレビの空きチャンネルを利用した自主放送設備により24時間伝達・確認できるようにしました。これによりどこかで滯る回覧板を廃止することができました。

③対外向けのホームページ運営による防災意識の啓発

防災情報や防災知識をより多くの方々に発信する目的でホームページを開設、内外に防災情報やマンションの情報を提供しています。

④「防災情報モバイルホームページ」の運営

被災時にライフラインの中で一番復旧が早いと言われている携帯電話を利用した伝達システムを構築しました。携帯電話でも見ることのできる防災情報サービス「グリーンシティモバイル防災会」で情報を提供し、携帯電話で災害情報や防災啓発情報、心肺蘇生法の学習等を行っています。

⑤防災井戸設置（写真4）

災害によるライフラインの断絶、および非常トイレ等の対策として準備しました。災害時には、すべてのライフラインが停止する可能性があり、その中でも断水は生活に非常に大きな影響を与えます。そのため、生活用水の確保が不可欠となります。このような緊急事態に備え、非常時の「水」を確保するためにグリーンシティでは防災井戸を設置しました。また、子どもたちに「水の大切さ」を知ってもらうための小さな公園も同時に造りました。

飲料水は最低一人一日3リットル以上が必要と言われています。災害発生時、飲料水は周辺自治体からの給水活動や救助物資及び一般小売店でのペットボトル販売などで確保はできます。しかし最近の災害事例から問題は、大量に必要な「生活水」と思われます。被災住民とし生活していくために最低限必要な「生活水」は、どんなに少なく見積もっても、一人一日50リットルは必要です。

その中で最も必要とされるのが、トイレの水と言われます。人間生きしていくために、入浴は我慢できますが、排泄行為を我慢することは不可能であり、現在のトイレはほとんどが水洗でその洗浄水は1回に10リットルが必要とされています。少量の水で流すとすぐに排水管が詰まってしまいます。最近ではライフラインに壊滅的な被害を及ぼした新潟県中越地震でも井戸にはほとんど被害が無く、生活に必要な水の確保ができたという報告があります。グリーンシティ防災井戸の水は地下30メートルから汲み上げ、飲料水適応検査も定期的に行ってています。



写真4 防災井戸設置

最後に

防災素人集団であった加古川グリーンシティ防災会に惜しみなく情報をいただきました全国の防災機関の方々、ご支援ご協力をいただきました多くの専門家の先生方、私たちの活動を世に広げてくださいましたメディアの方々には大変感謝をしています。また、私たちが「本当の意味での防災減災を学ぶ」ことができたのは室崎益輝・関西学院大学総合政策学部教授の助言によるものであり、グリーンシティ防災会の歩みを色々な場面で支援していただき深く感謝しています。そして、私たちがこのような「新しいスタイルの防災活動」を行い、現在も防災会が継続できているのは吉村秀實・元ＮＨＫ解説主幹（ジャーナリスト）との出会いに始まると言っても過言ではありません。

私たちの活動が周りから色々な批判を受け、「楽しく防災活動」を掲げることは本当に正しいのか迷っていた時に、「何事にも楽しさをキーワードにすれば、現在の組織の幅を広げることができ、男女や世代を問わず多くの人たちを取り入れることができる」と後押しをしていただいたことで現在の加古川グリーンシティ防災会の防災活動があります。私たちは心から吉村秀實氏に感謝しています。

加古川グリーンシティ防災会のホームページ

URL <http://www.greencity.gr.jp/>

主な受賞歴

平成18年度 防災功労者 内閣総理大臣表彰

第10回 防災まちづくり大賞 総務大臣賞

第9回 日本水大賞 厚生労働大臣賞

兵庫県 優良自主防災組織 知事表彰

第61回 神戸新聞平和賞 社会賞受賞